健康総合科学科 選択科目「医療人類学」
2013 年 5 月 24 日
「概念を提示してケースを読み解く」
サイクル２：身体観　　主担当： 田所聖志

１.「身体観」とは

<u>学習のポイント</u>
身体観：人間の身体がどのようにしてつくられているかに関わる信念
（Cultural beliefs about the body）
同じ疾患に対する処置が国や文化によって異なることを、身体観の違いで説明できないか。

身体観とは、人間の体がどのようにしてつくられているかにかかわる信念である。現代医学における身体観は、生殖、細胞、ＤＮＡ、代謝などの医学用語で語られるようなものである。一方、それぞれの文化では、現代医学のそれとは異なる身体観が共有されているのも事実である。そのような身体観はふだんの生活では意識されないようなものであっても、異なる身体観をもつグループ間で、健康あるいは医療にかかわる行動を比較することによって、その存在が明らかになることもおおい。

この講義では、最初に、「伝統的な」身体観が現代医学のそれにたいして優位性をもっているパプアニューギニアの社会を事例として、「身体観」というものの存在を明らかにする。

次に、「伝統的」な中医思想と現代医学が併存する中国を事例として、中医思想を背景とした健康行動と身体観を考察する。そして、最後に、現代医学の「身体観」が優先する日本などの社会において、その「身体観」の実態を考察し、それが健康行動・医療行動にどのような影響を及ぼしているかを議論する。（梅崎）

２．ニューギニア島の社会の身体観
＜ビデオ教材＞
１.「すばらしい世界旅行」ニューギニア高地人
２.「ナショナルジオグラフィック」“Blood Initiation” <www.youtube.com/watch?v=7hQEJIaciRM>

世界各地にあるさまざまな身体観のひとつとして、身体が「体液」から構成されており、その体液の状態によって健康が左右されるとする考え方がある。こうした「体液論」と呼ばれる身体観は、さまざまな時代や地域にあった。たとえば、古代ギリシア人は、血が重要な要素と考えた。また、近代ヨーロッパ人も、血の状態によって健康状態が変わると考えたため、病気になった時にヒルに血を吸わせて身体から血液を意図的に出すという対処（＝瀉血療法）を行った。実は、現代医学も「体液論」に基づいて発展してきたのである。

<u>ニューギニア高地人の身体観</u>
ニューギニア島には 800 以上の社会があり、それぞれの社会で身体観にも違いがある。ニ

ューギニア島の人びとの身体観も「体液論」と呼ぶことができる。1990 年代までの報告から、ニューギニア高地人の身体観について概括してみたい。

ニューギニア島の社会では、身体を構成する要素（＝身体構成要素）は、男女で質的に違うとされており、成長の論理と健康維持の方法は男女で異なっている。まず、そもそも、子供がどのようにつくられると考えられているのかを押さえておきたい。

▽性によって異なる身体のしくみ

ニューギニア島の社会では一般に、男女ともに胎児の身体は、性交によって父親の精液と母親の性器のなかにある血液が混じりあってつくられるとされる。しかし、生まれた後の胎児の成長過程は男女で異なるという。

女性の場合は、一般に、身体のなかにある血液と油によって健康が維持され、それらが少なくなると健康が損なわれるとされる。また、血液と油は、女性の成長の主要源でもあり、これらの体内での量が増えると身体が成長する。このうち、油は、肉や脂肪や脂質が多いとされる植物などを食べることで、身体のなかに取りいれられる。また血液は、十分な食べ物をとれば、女性の身体のなかでつくりだされる。したがって、女性は、食べ物の摂取によって、血液と油を身体のなかに蓄えて健康を維持でき、身体の成熟による二次性徴もいわば自然と生じるとされる。また、血液が身体のなかに維持できないほどたまると、血液は性器を通して身体の外にあふれてしまう。それが生理なのだとされる。

一方、男性の身体は、自然のままでは成長が難しいと考えられている。体内の血液と油は、男性の身体と健康を維持するために必要であるものの、成長を促す主要源とは見なされていない。男性の成長促進と健康維持を支える論理は、二つの考え方に基づいている。ひとつは、「女性器に由来する血液の影響によって、男性の成長と健康は阻害される」という考え方である。もうひとつは、「成長をうながし健康を維持する主要源は身体のなかにある精液である」という考え方である。

男性の身体についての身体観は、この二つの考え方を中核として、以下の三つの信念を含んでいる。

第一は、生まれもって母親から受け継いだ血液の影響についてである。生まれた直後の男児の身体には、母親の性器内部の血液に由来する血液が充満しており、その血液は胎児の形成に不可欠な要素とされる。だが、それと同時に、その母親由来の血液は、男児の身体の発達にとってはきわめて有害であるとされる。また、母乳や母親から与えられた食べ物を通じても、母親由来の有害な血液は、男児の体内に取り込まれる。そのため、男児が順調に成長するためには、母親から伝達された血液を体内から除去することが必要とされている。

第二は、日常生活での母親以外の女性との接触から受ける血液の影響についてである。女性一般の性器内部の血液は男性にとって有害であり、それとの接触によって男性の健康が損なわれるとされる。姉妹などとの食べ物の受け渡しといった日常的な交流や、妻との性交などを通じて、男性は日常的に、女性の性器に由来する血液と直接的にも間接的にも接触する。この接触によって、男性体内の血液は有害なものに変化するという。この変化した状態の血液を放置すると、男性の健康は損なわれてしまう。そのため、血液が有害になってしまう危険をできるだけ回避するため、男性には、女性との接触を制限する様々なタブーが課せられている。

第三は、男性の成長と健康を維持させる身体構成要素である精液の役割についてである。男性の体内の精液は、日常的に生活していても減っていくし、性交によって体外に精液がだされることでも減少する。精液が減ることで男性の健康は損なわれるため、成長と健康の回復や維持のために、日々失われる精液を意図的に増大させる措置が必要とされる。

▽身体観に基づく実践

ニューギニアの男性のあいだでは、このような身体観と対応した実践が行われてきた。

女性由来の有害な血液を体内から除去し、精液を増大させる方法は、パプアニューギニアのなかでも、社会ごとに論理が異なっており、また、その分布に明確な傾向もない。大きく次の 2 種類に分ける類型論が出されている。ひとつは、（１）肉や脂肪などの食べ物の摂取で体内の精液を増大できると考えるタイプの社会である。もうひとつは、（２）直接的な精液の摂取によって、それが可能とされるタイプの社会である。

（１）のタイプの社会では、肉や脂肪などの食べ物は体内に摂取されると、精液となって体内に蓄えられる。このタイプの社会では、女性器由来の血液が男性の身体に与える有害な作用を強調する傾向が強く、こうした血液を体外に除去することが、男性の成長と健康維持のためになによりも重要な行いであり、男性の関心事となる。また、男性は、有害な血液を除去するために一定のサイクルで瀉血をおこなう。なお、血液の作用を重視することから、このタイプの社会は、「血液複合」型と呼ばれることもある。

一方、（２）のタイプの社会では、体内精液の充満による強壮さの維持と、精液の枯渇による精力の衰弱への恐れが強調される傾向が強い。このタイプの社会では、食べ物の摂取は体内の精液の量を増やすには不十分であるとされ、精液を男性の体内に充満させる儀礼的な手段が発達している。その方法は、肛門性交や経口による体外からの直接的な精液摂取が含まれる儀礼によるものと、聖なる祭祀対象物である横笛を用いた象徴的な手段が含まれた儀礼の二通りの方法が知られている。女性器由来の血液の有害な作用についての考え方もあるものの、このタイプの社会では、体内の精液の充満と、その枯渇が男性の関心事となっている。このタイプの社会は、「精液複合」型と呼ばれることもある。

以上のように、ニューギニア島の社会の男性の身体は、血液、精液、油という身体構成要素を軸として身体がつくられるという体液論の身体観が認められる。

実は、ニューギニア高地人の間には、外部から持ち込まれた新しい医療行為である輸血が、こうした身体観にもとづいて、独自の解釈を加えられて受け入れられている。ニューギニア高地人にとって、血液とは、親族関係のなかで世代を超えて伝達される、集団内部で均質な性質を備えた物質である。また、血液は個人の性格とは結びつけられていない。輸血に使われる血液は、父系、母系、姻戚関係にある人びとのものであり、患者と関係のある集団のアイデンティティを表すものである。

ニューギニア高地人が比較的スムーズに輸血を受容したという医療現象を読み解くときに、身体観という視点は参考となるのである。（田所）

［参考文献］

林勲男 1995 「フィーとウダ・ラースあるいは骨と肉―ベダムニ族の社会構造と世界観」『国立民族学博物館研究報告』19(3): 359-403。
栗田博之 1989 「民俗生殖理論と家族・親族」清水昭俊（編）『家族の自然と文化』弘文堂、pp.93-118。
杉島敬志 1987 「精液の容器としての男性身体―精液をめぐるニューギニアの民俗知識」宮田登・松園万亀雄（編）「性と文化表象」『文化人類学』 4：84-107。
ストラサーン、A. & スチュワート、P. 2009 『医療人類学―基本と実践』成田弘成（監訳）、古今書院。
（読み物）中島らも 1996 『ガダラの豚』集英社文庫。

３．中国人（主に漢族）の「身体観」と健康行動

■陰陽のバランスと食生活

中国人との会話の内容から中国人の「身体観」と健康行動の話を始めたいと思います。

私が中国に滞在していたとき、ニキビや口内炎ができると中国の友人や学生たちは決まって「上火了（shang huo le）」と言います。「上火」という言葉を直訳すると「体内の火が旺盛になる」という意味で、「了」は過去形です。つまり、彼らは、体内の火が旺盛になったことと、皮膚や口腔の炎症を関連付けていることになります。そして、彼らは「上火」になった私に、その症状に効くとされる食べ物（冷たい食べ物）を勧め、体内の「火」を下げようとします。この「火」という言葉と、この言葉の背後にある概念は中国人の健康行動に大きく影響を与えています。

体内の「火」を上げたり、下げたりしながら体調を維持し、体質を改善するという考え方は、いまから約 1800 年前に張仲景という人が執筆した『傷害雑病論』という医学のテキストが基本になっています。このテキストには、さまざまな病状を「陽」と「陰」に分類し、それに対する治療法が記されています（ちなみに、ツムラの葛根湯はこのテキストに書かれた生薬の配合割合を今でも守っています）。

「陽」とは身体の火が旺盛になること、またそれが引き起こす症状、「陰」とは身体が冷えること、またそれが引き起こす症状です。「陰陽」とは簡単に言えば「体温」です。そして、さまざまな病気は体内の陰陽のバランスが崩れたことに原因があるとされ、陰陽を調整することでそれを改善しようとします。このように、中国人の健康行動は陰陽のバランスを調整するという考え方が裏打ちしています。こうした考え方を中医思想（中国では漢方のことを中医と呼びます）と呼びます。また、中医で使用される薬を中薬といいます。

ここで注意したいのは、「陰」や「陽」、「体温」とは必ずしも 36.1 度や 39.2 度といった数値で判断されるものではなく、個人の主観的な感覚と中医師の問診によって判断されるものです。

さて、体内の火が旺盛になったときは、その火を鎮める必要があります。火を鎮める方法はいろいろとありますが、一般の人びとは適切な食べ物を摂取することで「陰陽」のバランスを整えようとします。

中医思想では、さまざまな食べ物を「熱い食べ物」と「冷たい食べ物」という二つに大きく分類しています（正確には寒性、涼性、中性、温性、熱性の 5 つ）。そして、のぼせる、いら

だち、便秘、口腔や鼻腔の炎症といった「上火」特有の症状が出たときは、寒性、涼性の食べ物を摂取するとよいとされます。寒性、涼性の食べ物とは、トウガン、トウモロコシ、セリ、ダイコン、ナス、キュウリ、トマト、ニガウリ、オレンジ、リンゴ、スイカ、マンゴー、お茶などです。

一方で、手足の冷えや悪寒といった「寒性体質」の人は、温性や熱性の食べ物を食べるとよいとされます。温性や熱性の食べ物とは、モモ、リュガン、ザクロ、サクランボ、ヤシ、ドリアン、アンズ、ネギ、コリアンダー、カボチャ、ニンニク、ニワトリ肉、ヒツジ肉、白酒です。ちなみに中性の食べ物とは、コメ、キクラゲ、ブドウ、クリ、ニンジンです。

ここでも注意しなければならないことがあります。それは、寒性や涼性の食べ物が必ずしも数値的（温度的）に冷たい食べ物ではないということです。中華料理では、キュウリやトマト、ナス、ニガウリなどを油で炒めた料理がでてきます。それらは、たいていは熱くてすぐには食べられません。それでも、それら食材は寒性や涼性です。つまり、熱性や寒性といった食べ物の属性は料理方法によって変化しないということです。

中国の人たちは、食べ物の属性をよく理解しており、「この症状にはこれを食べろ」とよく言います。また、飯店で食事をするとき、温性の食べ物ばかり注文していると、店員に「なんで寒性の食べ物も注文しないのか」と怒られます。いずれにしても、中医思想では、こうした食べ物を摂取することで体内の“火”をコントロールし、身体の陽陰のバランスを保つのです。

■中国医学と西洋医学の併存 - ナショナリズムとの関係

皆さんは、現在、さまざまな病名とその治療法を学んでいると思います。なぜなら、日本の医学のカリキュラムの基本は西洋医学で、西洋医学は病名を重視する医療体系だからです。一方、中国医学では、冷え性やほてり、更年期障害といった複数の要因が重なって起こる病気、また将来深刻な病気になるかもしれない体調不良を未然に防ぐことなど、漠然とした症状に対応します。

こうした中医に対して、西洋医学を学ぶ皆さんは「科学的根拠がない」と感じると思います。実際、中国国内でも中医思想に対して厳しい評価がありました。2006 年には中国の地方大学の研究者が「科学的根拠に乏しく、安全性も保証されていない中医は廃止すべきだ」という主張し、中医廃止の署名運動まで起きました。

こうしたなか、中国国内ではどのような反応が起きたと思いますか？　その大学研究者は皆から売国奴と言われ、厳しい批判にさらされました。つまり、中国では中医思想とナショナリズム（愛国主義）が奇妙なかたちで結びついていたのです。そのため、中薬に対して医学界では当たり前の薬効評価を冷静におこなえない状況でした。今では、すこしは冷静に科学的な根拠を探す研究機関も増えてきているといいます。

現在、中国人のなかでは、西洋医学は「治りは早いが副作用がある」、中医は「効き目は緩やかだが副作用がない」と認識され、必要に応じて双方を使い分けている状況です。また、とくに農村部では割安な中医薬を処方する診療所を増やし、裕福でない農民が中医薬を利用できる機会を増やそうという動きもあります。（卯田）

【参考文献】朝日新聞 2012 年 5 月 15 日　globe

４．日本における「身体観」とは？

・私たちはどのような「身体観」をもっているだろうか？

・「身体観」という分析概念は、どのような現象を読み解くときに有効だろうか？

４．次回への課題

・「身体観」という分析概念を使って、医療や健康と関わる現象を分析しよう。

例）

臓器移植に直面した家族の感じ方の違いについて調べ、「身体観」を切り口とした発表をする。

・3 人 1 組で 4 グループ。

・「おもしろい」発表。みんなを唸らせて。

・授業をふまえて、何を調べるか、何を検討するかをグループごとに話し合う。

・よそのグループより優れたプレゼンテーションをする戦略を意識して。

・みんなで採点・集計。客観的な評価を知る。戦略の練り直し。